

旭川医大病院ニュース

<https://www.asahikawa-med.ac.jp/>



編集 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
谷野美智枝

オープンホスピタル2024 ー大学病院で体験しよう！ー を開催しました

副病院長・看護部長 井戸川 みどり

職員の皆さん、日々の勤務に加え、大きな変革の波の中でも病院機能を維持していただき、誠にありがとうございます！患者の皆さんにおかれましては、医師の働き方改革やそれに伴うデジタル化へのご理解に感謝申し上げます。

2024年9月28日、旭川医科大学病院で初のオープンホスピタルを開催しました。このイベントは、次世代の医療を担う地域の若者たちに医療や看護への興味を持ってもらうこと、そして旭川医科大学病院で働く医療職の姿を地域に発信することを目的としています。主な参加者は旭川市および近隣地域の中高生で、当日は中学生50名、高校生100名、父母などを含め総勢200名が参加しました。

イベントでは、各医療職によるミニお仕事体験やスタンプラリーが行われました。看護師、薬剤師、臨床検査技師、リハビリ関連職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）、診療放射線技師、臨床工学技士、栄養士がそれぞれのブースを担当し、参加者に医療現場のリアルな体験を提供しました。



▲看護師体験の様子



▲臨床工学技士体験の様子

看護師体験では、血圧や酸素飽和度を実際に測定し、白衣を着て記念撮影を行いました。薬剤師体験では、調剤体験や薬剤に関するクイズを行い、薬剤管理の重要性について説明を受けました。臨床検査技師のブースでは、「はたらく細胞」をテーマに、模擬血液を顕微鏡で観察しました。リハビリ関連職では、日々の業務やリハビリテーションの動画視聴や、患者さんと目標を共有して行うことの重要性について説明がありました。診療放射線技師のブースでは、撮影した画像の処理やレントゲン撮影の方法を体験しました。臨床工学技士のブースでは、コロナ禍で注目されたエクモ装置の準備や作動のVR体験などが行われました。栄養士のブースでは、飲料の糖分や食事のカロリーについて学び、インボディによる体組成測定も実施されました。どのブースも体験だけでなく、参加者からの質問も多く、充実した時間となりました。また、スタンプラリーを達成した参加者には、オープンホスピタル2024記念オリジナルクリアファイルが配布されました。

参加した中高生からは、「医療現場の仕事への理解が深まった」「病院は様々な職種が協働して成り立っていると感じた」「将来の参考になった」といった感想が寄せられました。初開催にもかかわらず、参加者は各職種の具体的な仕事を体験し、医療職への興味を深めることができ、進路選択を考える良い機会となりました。

大学病院では、多くの職種が協働し、それぞれの専門性とチーム力で最善の医療を提供しています。今後も、このような体験型イベントを通じて、医療の魅力を次世代に伝えていくことを目指していきます。



▲診療放射線技師体験の様子



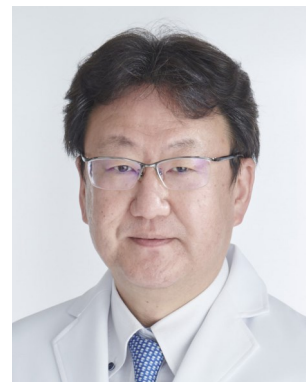
就任のご挨拶

内科学講座（循環器・腎臓内科学分野）教授 中川 直樹

このたび、2024年(令和6年)7月1日付けで、旭川医科大学 内科学講座 循環器・腎臓内科学分野の教授を拝命いたしました中川直樹と申します。本教室は内科学第一講座、通称「一内」を前身として、循環器・腎臓・呼吸器・脳神経内科など、生命に直結する内科領域を担当し、高度な診断と先進治療、基礎的・臨床的研究を行ってまいりました。旧第一内科は初代・小野寺壮吉教授、第二代・菊池健次郎教授、第三代・長谷部直幸教授のリーダーシップのもと、同門会員は280人を超える大講座へと成長し、関連病院では多くの同門医師が活躍し、道北道東の地域医療を守ってまいりました。このように大変歴史のある教室をお任せいただくことは、身に余る光栄でございます。

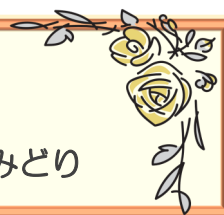
私は札幌市に生まれ、札幌旭丘高校卒業後は将来北海道の地域医療に貢献することを目指し、自治医科大学に進学いたしました。自治医大卒業後は、循環器内科医を目指し、本学第一内科に入局致しました。循環器・腎臓・呼吸器・脳神経を全てローテーションし、義務年限は道立焼尻診療所、道立羽幌病院、市立根室病院に勤務し、循環器内科・腎臓内科を中心に総合内科医として勤務してまいりました。米国ワシントン大学（シアトル）への留学を経て、これまで腎間質線維化研究、およびファブリー病診療に注力してまいりました。

2023年10月、循環器・腎臓内科学分野と呼吸器・脳神経内科学分野に再編されましたが、今後も旧第一内科の繋がりを保ちながら、やる気のある優秀なスタッフとともに若手の人材育成に尽力し、教育・研究・臨床・社会貢献に邁進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。



看護部長就任にあたって

看護部長 井戸川 みどり



令和6年4月1日付で看護部長に就任いたしました井戸川みどりです。日頃より看護部の活動にご理解とご支援を賜っております皆様に、心より感謝申し上げます。

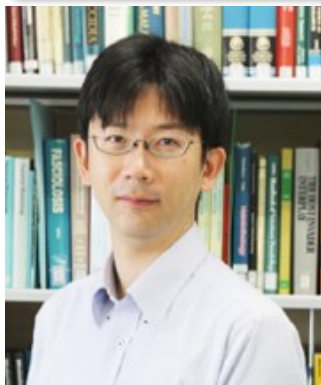
私はこれまで副看護部長を8年間務め、その中で看護基準や手順の見直し、コロナ禍における看護教育体制の構築、看護師特定行為研修の導入など、様々な取り組みを皆様と共に推進してまいりました。これらの経験を土台とし、新しい視点を取り入れながら、医療と看護の質向上に向けて邁進してまいります。

現在、医療を取り巻く環境は大きく変化しています。少子高齢化の進展や労働人口の減少による人材不足、予期せぬ感染症の流行や自然災害の発生により、医療現場は多くの課題に直面しています。今年度から開始される医師の働き方改革により、医療従事者全体にかかる負担が変わりつつある中で、看護職への期待もますます高まっていると実感しています。私たちは、こうした変化に迅速かつ柔軟に対応し、知識や技術を磨くことはもちろん、高度急性期の場合において、命と健康を守り、患者さんの「生活者」としての視点を忘れず、人権を尊重する看護をこれからも目指していきます。また、チーム医療の強化に努め、多職種との連携を一層深めることで、医療サービス全体の質を向上させるよう努力してまいります。さらに、看護職員が働きがいを持ち、自分たちの目指す看護を実現できる職場環境づくりにも力を入れてまいります。

患者さんとそのご家族から選ばれる病院、そして看護職員から選ばれる看護部となるよう、誠心誠意取り組んでまいりますので、今後ともご指導、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

旭川医科大学社会的インパクト創出プロジェクト始動 「トキソプラズマ症」はご存知ですか？

感染症学講座（寄生虫学分野） 准教授 伴戸 寛徳



みなさんこんにちは。2022年4月より感染症学講座寄生虫学分野の准教授に着任しました伴戸寛徳と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今年の7月より本学では、広く社会が直面する課題の解決に貢献することを目的として、社会的インパクト創出プロジェクトが5つ始動しました。そのうちの1つが、私たちが手がける『寄生虫トキソプラズマの感染対策推進プロジェクト』です。このプロジェクトでは、新薬開発に加え、先天性トキソプラズマ&サイトメガロウイルス感染症患者会「トーチの会」のみなさまと協力して、妊婦さんが特に気をつけなければならないトキソプラズマ症について一般の方々に広く知っていただけるよう、啓発活動にも力を入れていきます。

トキソプラズマは、人や動物に感染する寄生虫で、特に猫から人に伝染します。妊婦さんや免疫力の低い方にとっては深刻なリスクがありますので、感染予防のために衛生管理を徹底しましょう。トキソプラズマ症についての詳しい解説は、無料で配布中のパンフレットやトーチの会のホームページ等をご覧ください。今後も皆様のご意見・ご要望を取り入れて啓発活動に取り組んで参りますので、ご期待いただくとともに、ご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

～「トーチの会」代表 渡邊智美～

当会は、2012年に先天性トキソプラズマ症と先天性CMV感染症の子を持つ母親たちが立ち上げた患者会で、① 不安を抱える当事者や家族たちへのピアサポート、② 啓発活動、③ 国・自治体への働きかけといった活動をしています。感染症の予防や偏見・差別の防止のために、ホームページやSNS、マスメディアを通じて情報を発信し、社会的認知度を高め、支援や理解を得られるよう取り組んでいます。提供する情報は、医師や専門家の監修を受け、正確さにもこだわっています。

医療者の皆さんには、予防・早期発見のために妊婦健診や両親学級などでぜひ、妊娠中に感染しないための予防教育を行うこと、問診において初感染を疑うエピソードの可能性を見逃さないこと、検診での胎児の異常所見を見逃さないことをお願いします。皆さんの力で「親子の笑顔」を守って下さい。



～みなさまへのお知らせ～



トキソプラズマ感染症を広く知っていただくために次のような活動を行っています。講演・出前授業・セミナー等の依頼を随時受け付けております。PTAや父母の会の講演会・子育てサロン・幼稚園・保育園・認定こども園・小学校・中学校・高等学校など対象年齢や開催規模は問いませんのでお気軽にご相談ください。

啓発パンフレットやポスター・絵本を全て無料にてご提供しております。配布・設置等にご協力いただける医療・公共施設関係者のみなさまからのご連絡をお待ちしております。

これらの活動についてのお問い合わせは、感染症学講座 寄生虫学分野の伴戸寛徳まで、よろしくお願いいたします。

TEL:0166-65-2111（代表） E-mail: asahikawa.parasitology@gmail.com

がん診療の新時代へ：日立ハイテクと旭川医大が共同研究講座を設立

内科学講座（消化器内科学分野）教授
先進ゲノム地域医療講座 特任教授（兼務）

水上 裕輔

この度、旭川医科大学内科学講座（消化器内科学分野）と株式会社日立ハイテクは、共同研究講座「先進ゲノム地域医療講座」を設立しました。本講座では、血液や尿から遺伝子情報を分析するリキッドバイオプシーを活用し、膵がんなど早期診断が難しいがん種においても、低侵襲かつ早期にがんを検出する新しい分子診断の開発を推進します。また、画像所見や外科切除された組織標本を詳しく調査し、がんの発生や進行のメカニズムを解明することで、がんの早期診断および治療に向けた新技術の開発を目指しています。

がんの診断、治療、経過観察という一連のプロセスである Patient Journeyにおいては、日立ハイテクのDNAシーケンサーやデジタル技術を活用し、検査の実施から検査データの分析支援までを含むシステムの構築を目指します。このような産学連携を通じて、地域の医療機関とのネットワークを強化し、がん医療の質の向上に貢献したいと考えています。この新たな取り組みが、地域の患者さんや医療従事者の皆さんにとって大きなメリットをもたらすよう、研究活動を強化していきたいと考えています。

8月20日には、旭川医科大学と日立ハイテクの研究チームが一堂に会し、キックオフ会議を開催しました（写真）。今後、3年間の共同研究期間を通じて、地域医療に貢献する最先端の情報発信を目指し、取り組んでいく所存です。



バーチャルどうぶつえん開催の報告

4階西病棟（小児科）

4月20日（土）に4階西病棟（小児科）において『バーチャルどうぶつえん』が開催されました。旭山動物園と神奈川県企業が連携してシステムを作成し、旭川医科大学の学生さん（50周年医大祭実行委員）にもご協力を頂き、実現しました。アプリを入れたiPadをかざすと、そこに実物大の動物（ライオン・ペンギン・カバ・シロクマの4種類）が3Dで現れるというものです。毛並みや皮膚の性状も精巧で、口を開けたり首を動かしたりの動作もついた、とてもリアルなものでした。

当日は坂東元・統括園長にもお越しいただき、贅沢なことに子どもたちは園長さんから直接解説を頂きながら楽しみました。外出できない入院中のこどもたちが、普段見せないような表情で、目を輝かせて動物を観察する様子がとても印象的で、見ている周りの大人たちも自然と笑顔になるような素晴らしい時間でした。病院としてもChild Welfareの点で大変意味のある取り組みになったと考えています。なお同イベントは新聞、TVなどでも紹介され、多くの反響もいただきました。改めてお世話になった関係各位と、職員の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。



災害訓練（机上訓練）の実施について

総務課・経営企画課

8月21日（水）に災害状況に応じた医療体制等の確認及び職員等の防災意識の高揚を図るために、本学病院の「事業継続計画（BCP）」に基づいた災害訓練を実施しました。

訓練は、「旭川市地域防災計画」で想定する災害として記載されている、沼田－砂川付近の断層帯を震源とする震度6の地震が休日日中帯で発生した想定で始まりました。当直中の救急科医師、看護師長並びに看護師における院内の状況把握や臨時対策本部の立ち上げに始まり、その後、災害対策本部への引き継ぎを行いました。また、災害対策本部では、被害状況の情報収集はもとより病院内での機材トラブルや病院外からの問合せ等への対応、関係機関との連絡調整、クロノロ（時系列活動記録）等を実施したうえで、外部に向けたプレスリリースを行うといった一連の訓練を実施しました。

その他、災害拠点病院としてのDMAT本部の立ち上げ、被災者が本学病院を受診することを想定したトリアージ訓練も同時並行で行いました。トリアージ訓練には、名寄市立総合病院や旭川赤十字病院のDMAT隊員の他、本学の学生や模擬患者を担っていただいた地域の住民にも今回はじめてご参加いただき、より実践的な実りある訓練となりました。

本学は、災害拠点病院としての責務を果たすべく、今後とも訓練を積み重ね、また、防災に対する意識を高め、態勢強化に取り組んで参ります。



▲災害対策病院本部と災害情報センターの様子



▲模擬患者を用いたトリアージ訓練の様子



▲DMAT本部の様子

2024がんと運動全国キャラバンで「がんと運動の重要性」について講演してきました

リハビリテーション部 作業療法士 村田 絵吏

5月に東川町共生プラザそらいろで開催された、一般社団法人キャンサーフィットネス主催の「2024がんと運動全国キャラバン」に、当院リハビリテーション（以下、リハビリ）科大田教授と作業療法士の村田が講演者として参加しました。

昨今、がん患者の5年生存率は年々向上し、がん＝死の時代から、“がんと共に生きる時代”となりました。しかし、がんそのものや治療に伴う後遺症などで身体機能障害が生じる方は少なくありません。当院でも入院中の多くのがん患者を対象としたがんリハビリが実施されていますが、現在の医療システムでは、外来でのがんリハビリは保険適応ではなく、退院後に不安や孤独を抱える患者が多く存在しています。

一般社団法人キャンサーフィットネスは、がんサバイバー当事者である代表理事を中心に、運動を通して社会復帰のためのからだ作り、仲間との繋がりの機会を提供する活動をしています。今回は東川町民を中心として約90名の方が参加され、講演後のトークセッションでは参加者から多くの質問をいただき、大変活気が溢れた会となりました。

がんリハビリでは治療開始前の身体機能障害が生じていない時期からの開始が重要です。それは、長期の入院で生じる廃用症状の予防、治療を継続するための体力維持を目的とした運動が重要とされるからです。そして治療中には個々の身体症状に合わせた、できる限り患者のQOL向上をサポートすることを目指します。今後とも、地域がん拠点病院としてがんサバイバーをサポートする取り組みを続けていきたいと思っています。



令和6年 夏休みキッズスクール終了報告

二輪草センター長 谷野 美智枝

7月24・25日に恒例の夏休みキッズスクールを開催し、2日間で計28名の児童が参加いたしました。

二輪草センターの鈴木さん、近藤さん、松下さんが知恵を絞って子どもたちのために素晴らしいプログラムを作成してくれました。最初のプログラムでは、耳鼻科の大原賢三先生のご協力のもと『耳鼻科のお仕事』の特別授業を受けました。耳鼻科ではどんなことをするのか、こんな時どうしたらよいのかなどをクイズ形式で子どもたちにわかりやすく話をしていただき、実際に内視鏡で耳の奥や、「めまい」を体験し眼球運動を見るなど、貴重な体験ができたことと思います。続けて工作『レインボースティック』作りでは、それぞれ夏らしく涼しげで楽しめるアイテムを作ることができました。学食で昼食をすませたあとは、体育館に移動して、学生さんと『なんでもバスケット』や鬼ごっこ、ドッチボールをして思いっきり体を動かして遊びました。体育館中を走り回って、子どもたちは汗びっしょり！たくさん体を動かした後に作った「フルーツソーダフロート」は、冷たくて暑いさなかのおやつにはぴったりでした。最後の修了証書を渡すときにも「何が一番楽しかったですか？」と尋ねると「全部！！」と笑顔いっぱいに答えてくれました。盛沢山の1日はあつという間で、子どもたちは今年も帰り際に「まだ帰りたくない〜」「また冬に遊びに来るからね！」など別れを惜しみつつも、早くも次回の開催を心待ちにしている様子でした。今回も、7名の学生ボランティアさんが参加して下さり、事前の準備や後片付けを含めてお手伝い頂きました。子どもたちは何よりお兄さんお姉さん大好きで子ども達にとってとても楽しい思い出になったことと思います。忙しい中ご協力下さり心から感謝いたします。お忙しい中授業を担当してくださった大原先生、藤井智子教授をはじめ、いつも快く開催場所をお貸しくださる看護学講座の諸先生方をはじめ各部署の皆様にも、あらためて心よりお礼申し上げます。



5年ぶりに公開講座を再開！そして11月には市民公開講座を開催！

生涯教育検討委員会



▲第1回の講師は救命救急センター岡田教授

コロナ禍で中止していた公開講座を、5年ぶりに再開いたしました。

生涯教育検討委員会委員長 古川理事の指揮のもと「いのちを救う！災害・救急・感染症（コロナ）医療の最前線」をテーマに、9月から10月にわたって全5回を開催しています。能登半島地震にかけつけたDMATチームの証言をはじめ、現場で闘う旭川医科大学の医師が語る、この5年間の激動を埋めるに相応しい内容です。熱心に受講される姿、活発な質疑応答の様子が見られ、大変意義のある講座となっています。オンラインでの申込も当たり前の時代の中「あの方は元気かな」など考えながら、5年前の参加者

さんたちにご案内を郵送したり、懐かしいお声で復活を心待ちにしていたと申込のお電話をいただいたりと、嬉しい時間がありました。

11月9日（土）には市民公開講座が開催されます。こちら市民の皆さまが関心を寄せている3つのテーマで講演いたします。参加費無料、当日参加もOKですので、ぜひ足をお運びください。

また、**本学の活動状況を定期的にメールでお伝えするニュースレター**の準備を進めております。受信をご希望いただける方は左のQRコードまたはURLから、メールアドレス等のご登録をお願いいたします。今後も大学が持つ専門的かつ総合的な教育機能を広く社会に還元する活動を続けてまいりますので、どうぞご期待ください。



<https://krs.bz/amu-el/m/new>

地域を支え、未来を守る
最先端の研究と診療を
旭川から

**旭川医科大学
市民公開講座**

先着120名
参加費無料
事前申込可
当日OK

日時 令和6年11月9日(土) 14:00～16:15
場所 旭川市障害者福祉センター おびつた 会議室1
(宮前1条3丁目)

14:10～
こんな時には形成外科へ
～傷跡が気になる、瞼が下がって見えづらい、
乳房再建の話が聞きたい...など～
形成・再建外科講座 教授 林 利彦

14:50～
生活にいかず高齢者看護
～介護、認知症を中心に～
看護学講座 教授 菅原 峰子

15:30～
認知症
～人生100年時代に知っておきたいこと～
精神医学講座 教授 橋岡 禎征

旭川医科大学
Asahikawa Medical University

旭川医科大学総務課広報・社会連携課
TEL 0566-68-2118 (平日9～17時)
E-mail ic-cs@asahikawa-med.ac.jp

薬剤部

新薬照会 (86) レカネマブ (遺伝子組換え) (レケンビ®点滴静注)

薬品情報室 武田 怜

レカネマブ (遺伝子組換え) (商品名: レケンビ®点滴静注、以下本剤) は、2023年12月に発売された、抗ヒト可溶性アミロイドβ (Aβ) 凝集体モノクローナル抗体製剤であり、アルツハイマー病による軽度認知障害及び軽度の認知症の進行抑制に適応を持つ。規格は200mg、500mgがあり、当院では2規格とも本年4月より通常採用されている。

アルツハイマー病の病態進行そのものを抑制する世界初の薬という点で、本剤は他の治療薬と一線を画す。病理の一つであるAβのうち、神経細胞毒性が示唆されているAβプロトフィブリルに対して選択的に結合し、脳内のAβプロトフィブリル及びアミロイド斑を減少させることで、疾患の進行を抑制すると考えられる。

用法・用量は通常、10mg/kgを2週間に1回、約1時間かけて点滴静注する。投与時は必要量を250mLの生理食塩液で希釈する。

投与により、アミロイド関連画像異常 (ARIA) として、ARIA-浮腫/浸出液貯留 (ARIA-E)、ARIA-脳内微少出血・脳表ヘモジデリン沈着症・脳出血 (ARIA-H) が現れることがある。投与開始から14週以内の発現が多い。臨床症状を伴わないことが多いが、痙攣やてんかん重積等の重篤な事象、頭痛、錯乱、視覚障害、めまい、吐き気、歩行障害等が報告されている。定期的にMRI検査を実施し、MRI画像上中等度及び重度のARIA、又は症候性ARIAが認められた場合は、投与を一時中断する。

本剤は投与対象となる患者・投与施設が規定されている。無症候でAβ病理を示唆する所見のみが確認できた者及び中等度以降のアルツハイマー病による認知症患者には投与できない。必要な検査及び管理が実施可能な施設で投与を開始し、開始後6か月は同施設で投与する。詳細は最適使用推進ガイドラインを参照されたい。

臨床検査・輸血部 「TRALI (輸血関連急性肺障害) について」

臨床検査・輸血部副技師長 伊藤 敦巳

輸血副作用の1つにTRALI (Transfusion related acute lung injury; 輸血関連急性肺障害) があります。TRALIは、発熱・血圧低下に加え呼吸困難症状 (息苦しさ、息切れ、ゼイゼイ) を特徴とし、輸血中または輸血後6時間 (多くは1~2時間) 以内に発生する輸血副作用です。診断基準を右表 (上) に示します。輸血製剤中の患者さんの白血球に対する抗体 (HLA抗体、HNA抗体といいます) が主な原因と考えられていますが、詳細は未だ不明です。また、輸血前の血液検査 (交差適合試験) が問題なくとも未然に防ぐことが難しい副作用です。米国の報告によると発症頻度は輸血患者あたり0.16%とされています。

したがって、輸血後は副作用有無の経過観察を十分に行う必要があります。当院では輸血の①5分後、②15分後、③終了時に観察を行い、副作用がないことを確認しています。入院患者さんについては看護師が輸血終了以降も定期的に経過観察を行います。外来患者さんについては、右図 (下) に示す連絡票を輸血部門より発行して、有事の際には担当医師 (または救急部) にご連絡いただきます。TRALIのような副作用を認めた場合は、医師と連携して適切に対応します。輸血実施スタッフは輸血終了後に副作用が認められた場合は、電子カルテの「輸血実施」画面より、終了時の副作用の更新を行います。※副作用を認めない場合は、記録の更新は必要ありません。

臨床検査・輸血部としては、今後も患者さんや他の医療スタッフにとって安心・安全な輸血医療を提供できるよう努めてまいります。

1. TRALI

- a. 急性肺障害
 - i. 急激な発症
 - ii. 低酸素血症
PaO₂/FiO₂ ≤ 300mmHg, or SpO₂ < 90% on room air
 - iii. 胸部X線で両側肺浸潤影
 - iv. 循環負荷などは認めない
- b. 輸血前に急性肺障害を認めない
- c. 輸血中または輸血後6時間以内の発症
- d. 急性肺障害に関連する輸血以外の危険因子を認めない

2. Possible TRALI

- a. 急性肺障害
- b. 輸血前に急性肺障害を認めない
- c. 輸血中または輸血後6時間以内の発症
- d. 急性肺障害に関連する輸血以外の危険因子を認める

外来で輸血 (赤血球・血小板・血漿) を
受けられた患者様へ

輸血後に呼吸困難が出現したら、
直ちに担当医 (科) までご連絡下さい。

『特定生物由来製品 (血液製剤など) の使用に関する説明と同意書』に記載していますが、輸血中・終了後に輸血関連急性肺障害 (TRALI) を発症することがあります。
TRALIでは、輸血中もしくは輸血後6時間以内 (多くは1~2時間以内) に呼吸困難 (息苦しさ、息切れ、ゼイゼイするなど) が出現します。また、熱が出たり血圧が低下することがあります。このような症状が出たら、直ちに担当医まで連絡し、適切な対処法をお尋ね下さい。
酸素療法や、ときには人工呼吸器を用いた治療が必要になります。発症早期から適切に治療されると後遺症を残さずに回復するとされています。適切に治療されないと、不幸な転帰を取ることがあります。米国の報告では、輸血患者あたり約0.16%の発生頻度とされています。

旭川医科大学病院 輸血療法委員会

連絡先

診療科名

担当医名

連絡先電話 0166— —

もし、上記に連絡がつかない場合は、下記までご連絡下さい。
旭川医科大学病院救急部 0166-69-3590

診療技術部門のお仕事紹介

病理部 臨床検査技師による迅速診断標本作製

病理部 副技師長 秋山 直子

病理部での臨床検査技師の業務は、組織診断に関わる業務、細胞診断に関わる業務の大きく2つに分かれています。

その中で技師としての最も高い技術が要求されるのは、迅速診断に用いられる標本作製になります。迅速診断の検査所要時間（TAT）は、検体受付から30分に設定されています。そのため、病理医ができる限り長い診断時間を確保できるよう、素早く標本作製を行っています。また、時間にとられ質の悪い標本作製してしまうと、診断精度低下に直結してしまいます。

1分1秒でも早く、質の高い迅速診断標本作製ができるよう、病理部の臨床検査技師は日々、精進しています。

歯科衛生士のお仕事

特定技術部門 歯科口腔外科 歯科衛生士 藤倉 弓子

歯科衛生士（DH）は、歯科口腔外科に現在4名が在籍しています。主な業務内容は、手術前後、化学療法および放射線治療を受ける患者さんの口腔ケアと口腔衛生指導です。

プロフェッショナルな口腔ケアにより、口腔内の細菌が減少し、肺炎のリスクを低減させ、口内炎や粘膜炎などの有害事象の発生を予防することができます。また、患者さん自身のセルフケアとDHによるプロフェッショナルケアにより、口腔内の状態を良好に保つことで、手術後の食事摂取をスムーズにし、全身状態の回復を助けます。

さらに、化学療法や放射線治療を完遂できるよう、患者さんの状態に合わせたケアを提供しています。このように、口腔ケアを通じて患者さんの早期回復と健康の維持に貢献できるよう努めています。

令和6年度 患者数等統計

（経営企画課）

区分	外来 患者延数	一日平均 外来 患者数	院外 処方箋 発行率	初診 患者数	紹介割合	入院 患者延数	一日平均 入院 患者数	稼働率	前年度 稼働率	平均 在院日数 (一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
4月	29,910	1,424.3	97.8	1,059	101.1	13,781	459.4	76.3	78.9	10.1
5月	29,101	1,385.8	97.5	1,084	100.6	13,844	446.6	74.2	73.0	9.8
6月	28,571	1,428.6	97.6	1,034	100.3	13,498	449.9	74.7	77.5	10.1
計	87,582	1,412.6	97.7	3,177	100.7	41,123	451.9	75.1	76.4	10.0
累計	87,582	1,412.6	97.7	3,177	100.7	41,123	451.9	75.1	76.4	10.0

時事ニュース

- ・オープンキャンパス 7月31日（水）8月1日（木）
- ・災害訓練 8月21日（水）
- ・公開講座（全5回）
9月17日（火）24日（火）30日（月）
10月11日（金）17日（木）
- ・オープンホスピタル 9月28日（土）
- ・市民公開講座 11月9日（土）
- ・消防訓練 11月11日（月）



編集後記

8月から広報誌編集委員に加わりました、経営企画課の田中優美子です。

皆様どうぞよろしくお願いいたします。そして、委員会資料を見ると、今号の編集後記担当となっていました。新委員は同じ洗礼を受けるようです。さて、何を書けばいいのかしらん。

ほっこりする話も、くすっと笑える話も、私の持ちネタはない。うーん、今年無事に還暦を迎えたこと、庭からカエルの鳴き声がうるさかったこと、すずめの大群が家の前の電線に朝夕とまって、フンの害がひどかったこと、それともオリンピック観戦で寝不足になったことがいいかしら。秋の訪れを感じながら、悩む初老の女性。そしていたずらに文字数を稼いでいるではないか（笑）。

そうだ、素敵な編集後記は、次回の方にバトンタッチしよう。そうしよう。編集後記はダメでも本誌の内容は素晴らしいので、皆様楽しく読んでいただけると嬉しいです。

経営企画課 田中 優美子